

# 「子どもとのより良い育ちに向けた関係機関とのネットワーク」

～小学校へのスムーズな接続をめざして～

千葉県袖ヶ浦市立 平川 保育所

所長 稲毛 則子

千葉県袖ヶ浦市立 吉野田保育所

所長 三枝 加代子

## 平川保育所の概要

定員 90 名 現員 72 名 職員総数 25 名 設立年月日 昭和 37 年 4 月 1 日

## 袖ヶ浦市の概要

人口 62284 人 保育所数 公立 5 か所 私立 4 か所 小規模保育所 2 か所

## 1. はじめに

袖ヶ浦市は、東京湾沿いで千葉県のほぼ中央に位置し、羽を広げた蝶のような形をしている。5つの地区に分けられ東京湾に面した長浦、昭和地区は工場地帯があり、根形、平川地区（平岡・中川・富岡）は農業も盛んで自然も豊かである。また、東京湾アクアラインにより利便性の良い市でもある。人口は6万人を超え、袖ヶ浦駅海側の区画整理事業に伴う人口増が見込まれるが、地区による人口の片寄りも見られる。



袖ヶ浦市では子どもたちの「今と未来のため」に関係機関が手を携えて子育て環境づくりに取り組んでいる。市内には公立の保育所が5か所あり保育の向上に向け研修を行い、子どもの健やかな成長を願い、関係機関と連携を取り合っている。

## 2. 目的とテーマ設定

子どもの発達や学びは連続したものでありながら、保育所・幼稚園から小学校教育へと移行する際に、生活環境や教育内容等に大きな変化や違いが見られる。幼児期に遊びや体験を通じて育んだ「学びの芽ばえ」が小学校教育での「自覚的な学び」にスムーズに繋げていくことは重要であると考え。保育所では、様々な体験や生きる力を培い「自主性と主体性」を大切にされた保育を行ってきた。保育所から小学校へ「スムーズな接続」をする為にはまず、子どもたちの戸惑いや保育士、幼稚園教諭、小学校教諭らの考えを明らかにし、それを基に保育所・幼稚園・小学校（以後 保・幼・小と記す）のそれぞれの立場から接続期における連携の在り方を探っていきたいという思いからこの研究テーマに取り組むことにした。

## 3. 研究方法

### (1) アンケート調査

公立保育所・公立幼稚園の5歳児と袖ヶ浦市内小学校1年生の子どもたちの現状を把握し、担当者の思いを探る。

配布対象 公立保育所 5か所 5歳児担当経験のある保育士  
公立幼稚園 2か所 5歳児担当経験のある教諭  
市内小学校 7校と分校1校 現在1年生を担当している教諭

《アンケートから見えてきたこと》

- ・保・幼・小が入学までに育てておきたい事は、基本的な生活習慣の自立や話を聞いたり自分の考えを伝えることができるなどほぼ同じものであった。
- ・「学習の場面」では生活が「遊び」から「学習」中心に変わり45分座ることや教師の話を授業形式で聞くことに戸惑いが見られた。また、文字の書き順・鉛筆の持ち方などを正しく行うことに苦慮しているという記述が多かった。
- ・「生活の場面」では、保育所・幼稚園では身辺自立は「ほぼ出来る」として送り出しているが、小学校の教諭からみると出来ていないと感じるようで、出来ることの差の開きが見られた。  
施設の大きさの違いや和式トイレが使えない、決められた時間内で準備をする、行動することに困り感が見られるなど具体的にあげられていた。
- ・小学校の1年生に対する配慮として4.5月は2人体制で臨むなどして、子どもたち一人ひとりに目が届くようしている学校もあった。

- ・保・幼・小の連携については、お互い必要と考えつつも実際には時間が取れず出来難い現状である。その中でも連携をしている保・幼・小があり今回の事例に記載。
- ・児童要録については、活用している 32%、必要に応じて活用している 34%と 6 割を超えていたが、3 割は活用していないという回答もあった。

## (2) 保・幼・小で連携している事例

- ・平成 23 年から「保・幼・小学校の円滑な接続をするため」連絡協議会を設け年に数回話し合いの場や子どもたち同士の交流の場を設けている。この連携が今日まで継続しているのは、保・幼・小の立地が近く、保育所・幼稚園の卒園児の大半がこの小学校へ入学するという背景があり、学校が連携の中心となって行っているからと思われる。

### 《実践内容》

- ・小学校見学・・・校内の案内や授業を見学し実際の椅子に座る・ランドセルを背負う・お弁当を持参し教室で食べる・校庭の遊具で遊ぶ等。
- ・行事の交流・・・お互いの運動会を見学したり競技に参加。  
小学校の音楽コンサート見学・幼稚園主催のハロウィンに保.小が参加。  
ドッジボール・お店ごっこ・縄跳びなど遊びの交流など

年に数回ある交流には地域性や兄弟関係児童も多く、お互いが顔見知りであったり何度か交流するうちに打ち解けるなどしている。このこまめな交流が、子どもにとっては小学校という場所や雰囲気、年上の子どもたちに触れ、具体的に小学校生活がイメージ出来るようになり、慣れるのもスムーズになっている。また、子どもたちだけでなく、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭らが顔を合わせ、お互いの保育・教育現場を見聞きすることで子どもの育った環境がわかり、相互理解につながり子どもの話題に共通性が見出させるようになる。顔を合わせる機会が多くなることでお互いに話しやすさもある。

事例にある保・幼・小のように計画的でかつ継続的に交流を行っているのは袖ヶ浦市内では少ない。

## (3) 袖ヶ浦市の保・幼・小及び各関係機関との連携について

- ・公立保育所と関係機関の連携については、市役所の関係機関や地域との連携がある。
- ・公立保育所では平成 20 年から「見せ合い保育」を実施し保育の質の向上を行っている。平成 25 年には公立幼稚園も加わり、お互いの保育を見せ合い、保育内容や子どもの育ち等について話し合いをする場を年 3~4 回程度持っている。
- ・保育所と小学校との交流は、小学生が保育所を見学に来たり、入学前の 5 歳児が小学校を見学し、時には交流の場を設けるなどしている。小学校教諭と保育士との交流は少ないが、入学前に子どもの情報交換は必ず行っている。

- ・学校教諭が数日間、保育所で研修することがあり、子どもたちの様子や保育士の関わり方など知ってもらう機会がある。
- ・平成 28 年度、袖ヶ浦市では「袖ヶ浦市教育カリキュラム」の作成に向け、保育課・保育所・教育委員会・幼稚園・小学校・子育て支援課等の関係機関が連携する事となった。そこでは、0 歳～6 歳までのカリキュラムの作成、接続プログラムの作成を行い一貫した保育と教育の提供により発達の連続性を確保し義務教育に円滑につなげることを目的として取り組んでいる。

#### 4. まとめと今後の課題

今日、児童の学力や学習意欲の低下、生活に必要な技量の不足、小1プロブレム等が問題視されている。これらは、子どもを取り巻く環境の変化が生み出している実態の一面であると言われている。それを解決していくには、乳幼児期から関わる保育士が重要な役割となっている。

袖ヶ浦市の公立保育所では子どもの発達や育ちの連続性を考えた保育課程や年間指導計画を基に養護・教育を行っている。5 歳児では身辺自立や数や文字への関心を高める環境設定、遊びの充実、豊かな体験が出来るよう保育の充実を図ってきた。

アンケートから子どもたちの様子や保育士・幼稚園教諭・小学校教諭、それぞれの思いなども分かり、小学校でのつまずきの現状を知ることができた。子ども同士の交流や小学校を見学するなどの体験を通じて、子どもたちは具体的なイメージを持つことが出来き小学校への不安が期待に変わり、自然に馴染むことが出来てくると思われる。保育士・幼稚園教諭・小学校教諭が交流することによって、共通性や違いに気づくことが出来る。小学校教諭は子どもたちが経験してきた生活や活動、保育士の指導方法に触れることが出来る。保育士は子どもたちが小学校に入って変化していく姿を自身の目で確かめ、自分が関わった子どもたちの成長を知るとともに保育所で育てるべきことの再確認が出来ると考える。

今回の研究を機に、保育所・幼稚園・小学校の連携を密にして、保育・教育の充実を図り段差を乗り越える力を育て、小学校へのスムーズな接続をめざしていきたい。